

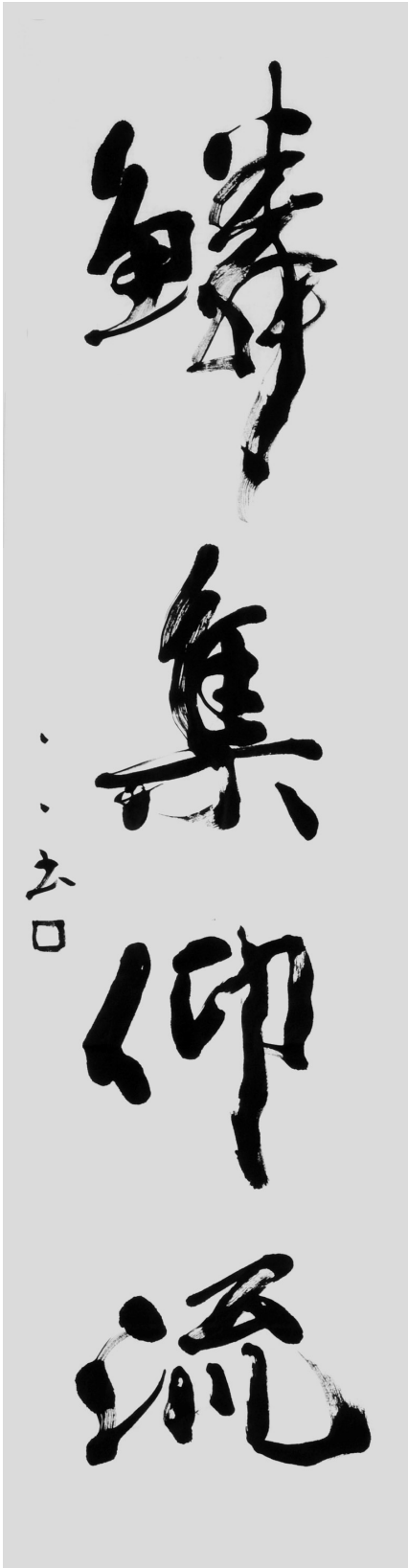
7月25日正午必着

明石春浦先生書



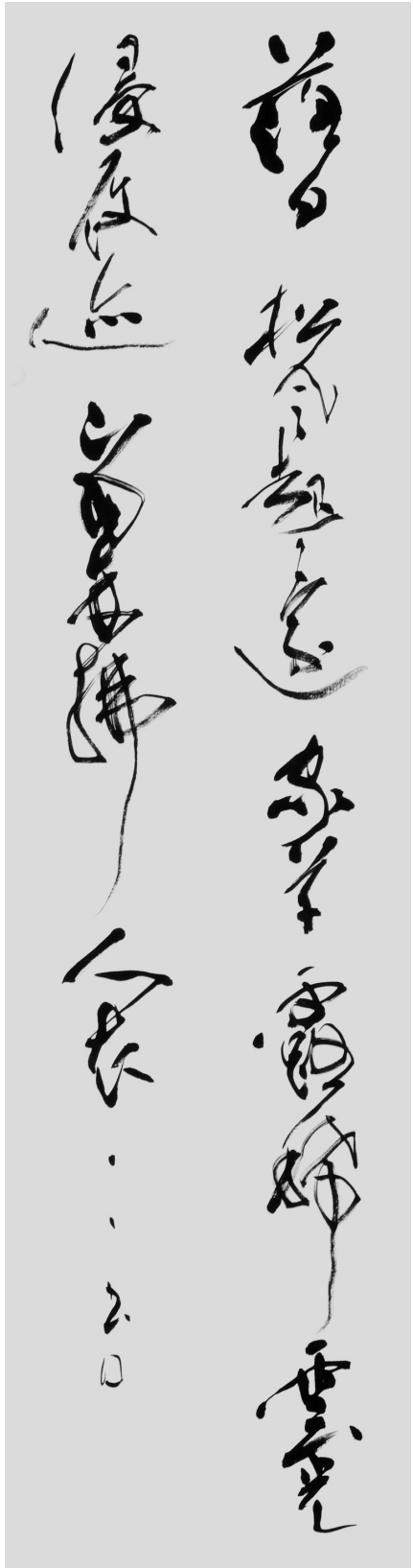
つゆはしょうこうをひいてしほさんきたり。あめはかきをもよおしてきんせんをうるわす。  
 露引松香來酒盞。雨催花氣潤吟箋。(劉因) 酒盞は酒杯。吟箋は詩を書きしるす用紙即ち詩箋。

森戸春濤書



りんあつまりてながれをおく。  
 鱗集仰流。(漢書) 多くの人々が、徳を慕って集まるたとえ。

明石幸子書



条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

落日松風起 還家草露稀 雲光侵履跡 山翠拂人衣 (裴迪)

水急不流月 (繙林宝訓)

水急なるも 月を流さず

いかにはげしい流れでも 映じた月は動かない。いかにはげしい世風に当たっても本心は寂然不動。

夏雨染成千樹緑 暮風散作一江煙 (錢惟善)

夏雨 染め成す 千樹の緑 暮風 散じ作す 一江の煙

雨毎に緑は色をまし、夕方風が吹けば、散りて煙となる。

終南別業 (王維)

終南の別業 王維

中歳頗好道 晚家南山陲

中歳 頗る道を好み 晩に家す 南山の陲

興來每獨往 勝事空自知

興じ来れば 毎に独り往き 勝事 空しく自ら知る

行到水窮處 坐看雲起時

行きて到る 水の窮まる 処 坐して看る 雲の起る時

偶然值林叟 談笑滯還期

偶然 林叟に値い 談笑して 還期を滞らしむ

蚊遣火の烟は軒をつたひつつ たちものぼらぬ 雨の夕暮 (松平定信)

半紙部規定課題A

7月25日正午必着



※作品には必ず落款を入れてください。

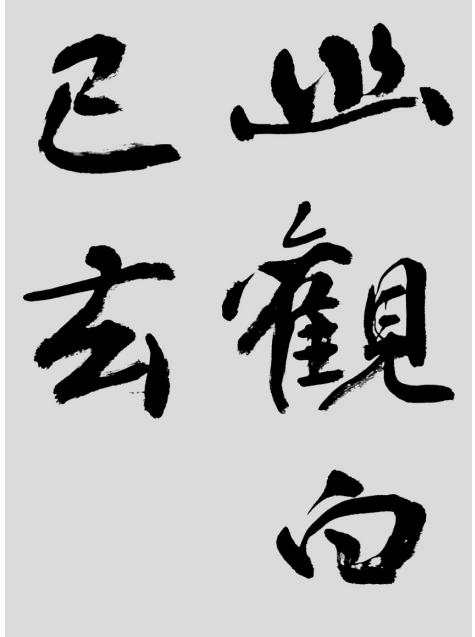
明石春浦先生書

※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。

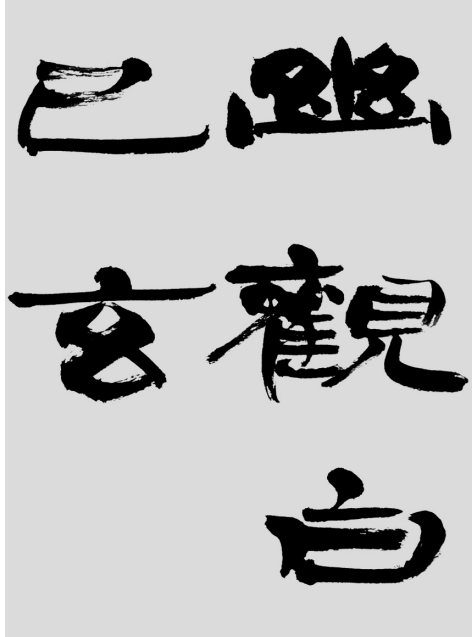
半紙部規定課題B

7月25日正午必着

行書



隸書

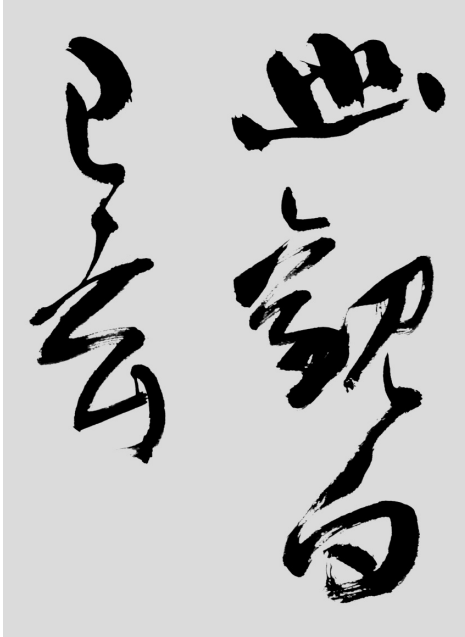


明石春浦先生書

草書



行草書



池中の島はすがすがしい木陰におおわれ 遊興の船をうかべる人もない  
 山中の蟬は鐘をうちならすかのように啼き 花におく露は水晶のようにまるい  
 静の極みの中に、朝夕をすごし 奥深く観照すれば、すでに玄妙に達する  
 故郷もちょうどこのようであらうものを どうして帰田の賦を吟じないのであろうか

林館避暑

羊士諤

池島清陰裏

無人泛酒船

山蛸金奏響

花露水精圓

静勝朝還暮

幽観白已玄

家山正如此

何不賦歸田

林館に暑を避く

羊士諤

池島清陰の裏

人の酒船を泛ぶるもの無し

山蛸金奏響き

花露水精円かなり

静勝朝還た暮

幽観白已に玄

家山正に此の如し

何ぞ帰田を賦せざる

(出典)

朝日新聞社刊

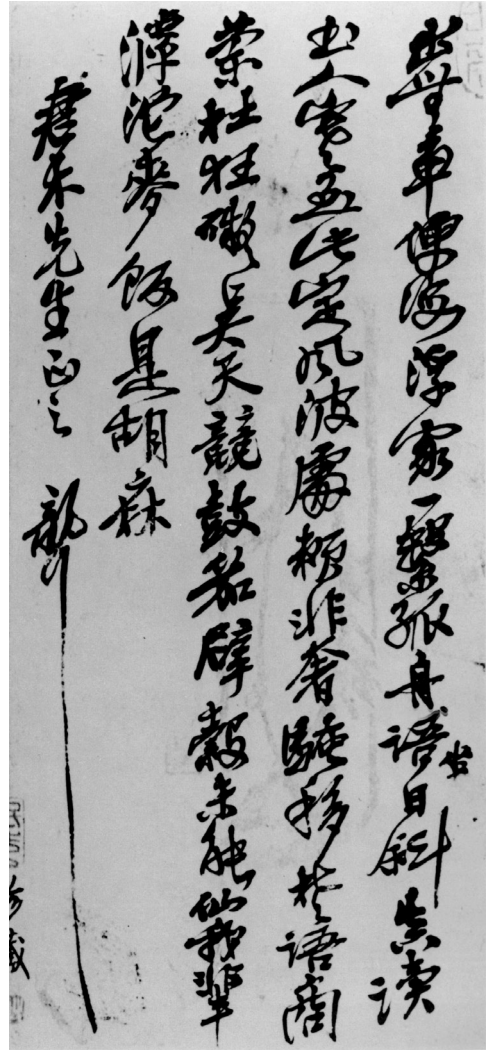
「三体詩」下より

7月25日正午必着



一系の孤舟 坐(語)すれば日は(斜めなり)

三浦士岳先生臨書



出無車便海浮家 一系孤舟坐日斜  
 真讀書人寒至此 定風波處賴非奢  
 騷移楚語商蘭杜 狂碍吳天競鼓笳  
 辟穀未能仙我輩 滹沱麥飯是胡麻  
 君木先生正之 聾

出づるに車の便無し 海に家を浮べん  
 一系の孤舟 坐(語)すれば日は斜めなり  
 真の讀書人は 寒 此に至り  
 風波を定むる 処頼るも奢に非ず  
 騷は楚語を移して 蘭杜を商り  
 狂は吳天に碍られて 鼓笳と競う  
 辟穀 未だ我が輩を仙とする能わざれば  
 滹沱の麦飯 是れ胡麻  
 君木先生 之を正せ 聾

清 吳昌碩・行書詩箋

吳昌碩は清朝の道光二四年に浙江省安吉県に生まれ、中華民国一六年に上海で没した。(一八四四〜一九二七・享年八十四歳)名は俊、長じて俊卿といい、字は昌碩、倉碩・蒼石・缶廬・苦鐵・老蒼などと号した。

清末から中華民国の初期は大動乱の時代で、十七歳の時に太平天国革命の争乱が郷里に及び、一家は離散した。彼は難を逃れてひとり湖北省・安徽省などを五年間流浪した。二十一歳の時によく故郷にたどりつき、年老いた父と再会し、一緒に百姓をして生計をたてていた。

吳昌碩は、若いときから仕官の道にはまったく興味を示さず、ひたすら文学、芸術に打ち込んでいた。二十九歳の時故郷を離れ、杭州・蘇州・上海と遊歴し、文学を愈樾に学び、書を楊峴に、画を任頤に学んだ。一九〇四年に金石書画の研究団体として西泠印社が設立され、彼は推されて初代社長に就任した。久しく蘇州に住み、晩年には上海に定住し、文墨活動に励んだ。篆刻は十代から始め、書は中年以降晩年まで石鼓文の臨摹に没頭したが、王鐸や米元章を習ったといわれる行草書にも篆書の用筆法をとり入れた独自の直線的なスタイルを作り上げていった。詩箋は詩の原稿を人に与えるため書きなおしたもので年代による書風の変化も興味深い。(春濤)



心静夢舒長

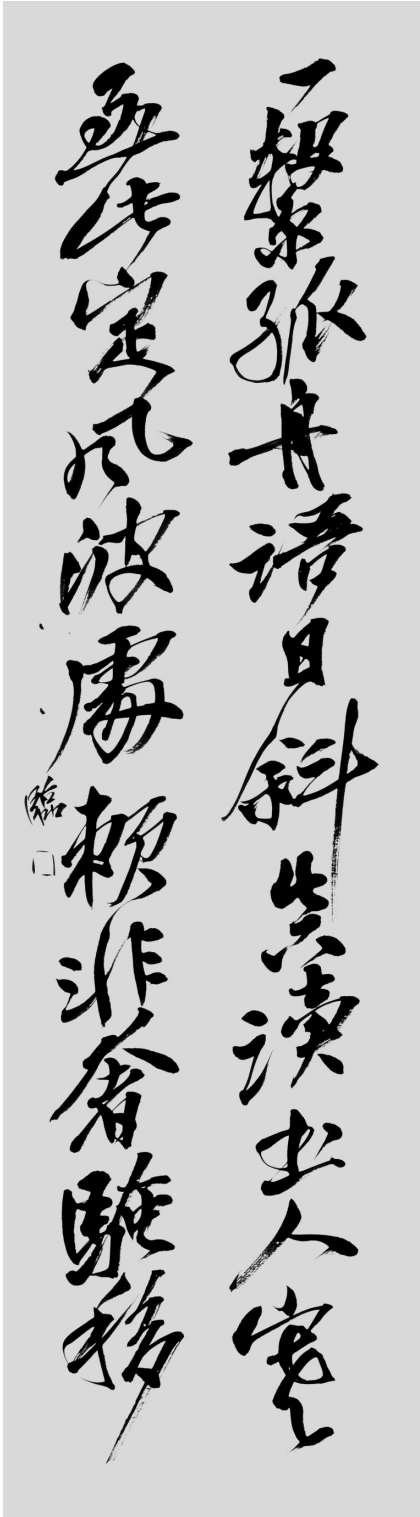
(周 昂)

心が静かで、夢のようにのどかである。

△做書参考作品▽

※この釈文での臨書部門の出品は出来ません。

一系いっけいの孤舟こしゅう 坐ま(語)すれば日は斜ななめなり 真まことの読書人どくしょにんは 寒さむ 此こゝに至いたり 風波ふうはを定さだむる処ところ頼たよるも奢しやに非あず 騒さわは楚そ(語)を移うつして





べつ ぶ おん せん  
別 府 温 泉

中学一年

雨宮春聲先生書



かいちゅう ど けい  
懐 中 時 計

中学二三年

菅井松雲先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



む かい 風

小学五年

榎戸春龍先生書



あたらしい 家

小学六年

藤井良泰先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



7月25日正午必着



う き くさ草

小学三年

藤田幸春先生書



あま雨 やどり

小学四年

細谷春誠先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



明石幸子書

う え 小学一年・幼年



森戸春濤書

あ う 小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

教育部硬筆

ペン字部

雨雲の間から晴れ  
間が見えてきた

小学五年

物事を正しく判断  
することが大切だ

小学六年

大きな黒船を動かす  
たのは蒸気のカです

中学

人が天から心を授けてい  
るのは愛する為である

一般(級位)

心あてに見し夕顔の花散り  
て尋ねぞ迷ふたそがれの宿

心あてに見し夕顔の花散りて 尋ねぞ迷ふたそがれの宿 (松平定信)

一般(段位)

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

る	そ
	ら
あ	を
ま	
の	な
が	が
わ	れ

幼年

か	う
な	み
の	の
て	中
ん	は
ご	
く	さ

小学一年

つ	水
け	中
て	め
お	が
よ	ね
い	を
だ	

小学二年

つ	午
と	後
雨	に
が	な
や	っ
ん	て
だ	や

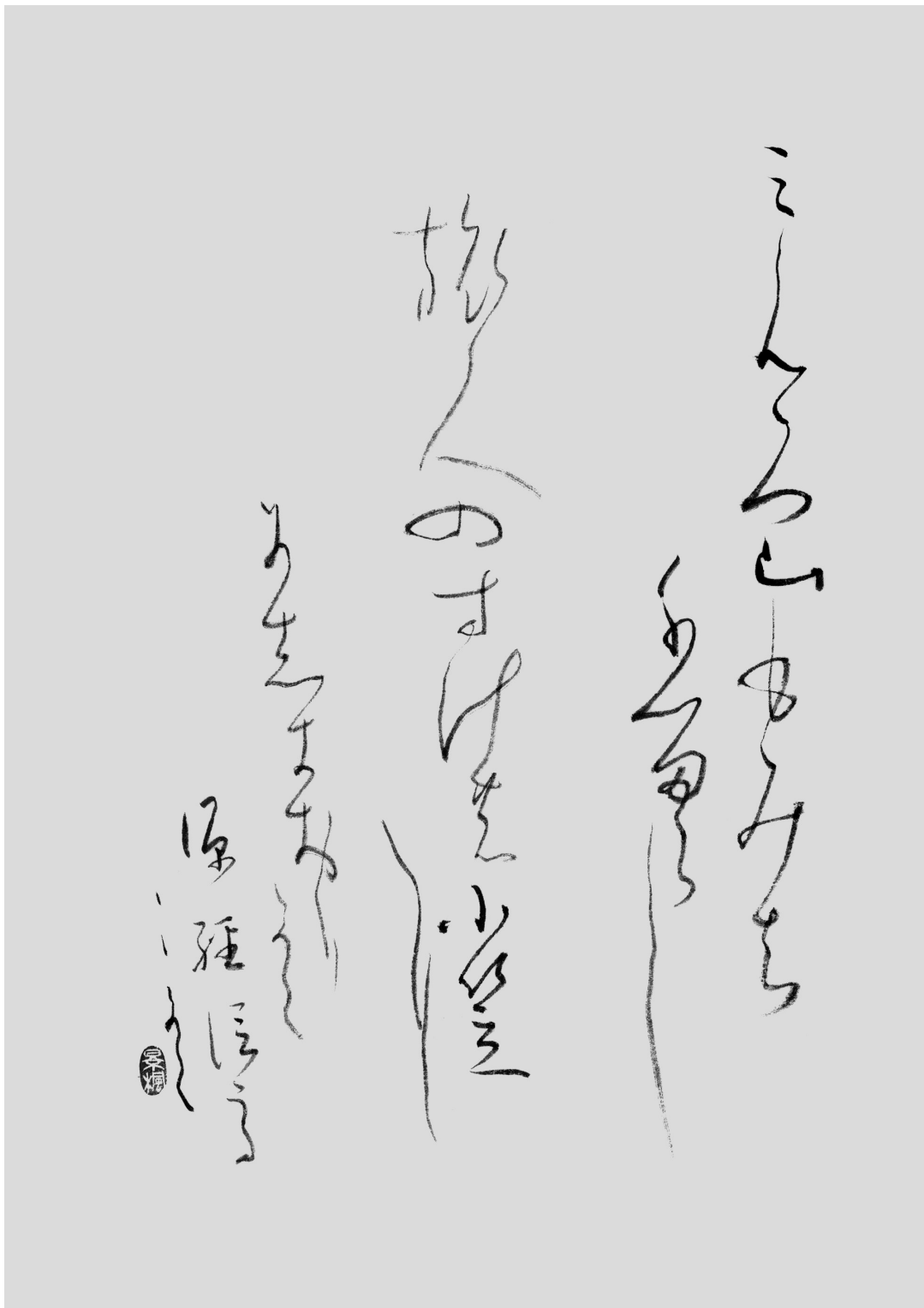
小学三年

気	湖
持	上
ち	を
よ	わ
か	た
っ	る
た	風
	が

小学四年

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。



三  
无  
みむろ山もみぢちるらし旅人の  
すげの小笠そがさにみにしきおりかく

(源經信)

岩本景楓先生書